

トルコ大地震の被災地で救援活動を続けるAMD A(アジア医師連絡協議会、菅波茂代表)。現地スタッフから、広がる被害への不安とともに、トルコの人たちの「生」への訴えも寄せられた。現地で、医師らが見たトルコの姿を、AMD Aに入った情報から緊急報告する。

【8月22日】イズミト郊

外のヌシエティエ村にて、本格的に診療を開始した。この村では、現地で出会った日本のNGO、AVN(アジアボランティアネットワーク)の医師1名と調整員1名の計2名と一緒にになり、同じ場所で活動を開始している。AVNは、最終

トルコで AMD A 救援報告

的に3名になり、8月いっぱいまで活動を終える予定。当方は今後の増員もあり、当地だけでは人員の余剰が見込まれるため、新たな候補地を検討中。ギョルジュクの赤新月(赤十字に相当する団体)からの情報を頼りにすることになる。

ヌシエティエ村では、村民の家に宿泊している。薬は、種類が足りない感じ。小児用の薬品、呼吸器・消化器感染症用。気管支ぜんそくの内服薬。整腸剤。風邪薬、セッシン(ピンセット)が不足です。滅菌割り

ばしもお願いたします。【8月22日夜】本日の診療患者数85名。村民のほとんどは余震を恐れて、家外で眠っている。肌寒い日



22時、アルバニア医師2名が到着。

AMD Aによると、同村の人口は約1000人だが、他都市からの避難者で人口が増加している。派遣チームのもとにも、診察開始早々から患者が殺到し、重症者と小児を優先して診察したという。トルコ南部では毎年のようにコレラの発生があり、衛生状態の悪化が懸念されるとい

もあり、年齢を問わず(しかし特に小児に多く)呼吸器感染症や消化器疾患が多い。地震による外傷と不安・不眠の訴えも目立つ。

医師らからなる4人の救援チームをトルコに派遣している。日本からは、上田明彦医師(32)と、国際協力事業団(JICA)のトルコ地震防災研究センター員の経験がある大塚豊彦さん(32)と、広島県廿日市市に2人が派遣されている。2人は現在、ヌシエティエで診療・救援活動している。

14人追加派遣へ

AMD Aは、24日からさらに、日本留学中のトルコ医師を含む14人(うち医

師7人、看護婦2人)をトルコ支援のため派遣することを決めた。チームは日本人医師2人、トルコ人医師1人、パキスタン人医師2人、ソボからの医師2人を含み、トルコ人医師ミーメット・グンデウスさん(33)と岡山市に現在岡山大学大学院に留学中で、母国での惨事を救援するため参加。またAMD Aが支援活動を行ったソボ自治州の2医師も「今回の地震は人ごとでない。トルコ支援にぜひ参加したい」と参加を申し出た、という。

余震恐れ屋外で眠る村民

薬の種類が足りない